

京極読書新聞 <第79号>

発行日 平成28年6月1日(水)
京極町生涯学習センター湧学館

京中生に インタビュー

2016・第2回

キラッと光る、おもしろそうな本を読んでいる京中生が多くて、今年はできるだけインタビューの時間を長くとるようにしています。 <編集部>

大西 美月さん(2年)「舟を編む」 新谷 保人(湧学館司書)



「舟を編む」三浦しをん／著（光文社，2011）

新谷 『舟を編む』の読書感想文、いいですね。なにか、自分の中学生時代を思い出しましたよ。

大西 この本は去年読書感想文のために読んだとか、そういう本ではないんです。本が出た時から何度も何度も読んでいて、その度に新しいおもしろさを感じることができる大切な本です。

新谷 図書館司書が夢だそうで、そういう人が『舟を編む』を読んでいることには意味があると思います。「舟」とは総合出版社・玄武書房の大看板国語辞典『大渡海』。「編む」とは、その玄武書房の辞書編集部スタッフの人間模様といえますが、そのさまざまな人間たちの動きや心理がなにか懐かしいものを感じさせます。

大西 へえ。

新谷 辞書編集部の松本先生も荒木部長も主人公・馬締光也（まじめ・みつや）も片時も「用例採集カード」を手放さないでしょう。昼飯を食っている時でも、食堂のテレビが何か知らない単語を話したならすぐにカードに書きとめる。ああいうカードが膨大に集まって、取捨選択されて、一冊の辞書に編まれて行く。図書館の場合は、「ことば」ではなくて「本」になるわけです。

新谷 膨大な「本」が集まってきて、そのデータが累積されて、その「本」を読む人たちのデータも累積されて行く。図書館司書の力量は、その膨大なデータの全体像を自分の頭の中にイメージできるかできないかです。

大西 馬締さんですね。

新谷 そうですね。昔は図書館も本一冊一冊に対して「目録カード」というのを作っていたんです。それがコンピュータ全盛の世の中になって、図書館も全部電子データの世界に変わってしまっていて、私みたいな昔の司書は絶滅危惧種になりつつあるんですけどね。それだけに、玄武書房の辞書編集部にこんな懐かしい顔ぶれが残っていたなんて本当にびっくりでした。「無駄な人員」西岡さんを含めて、みんな懐かしい面々ばかりです。

大西 じつは、私も、西岡さんは少し気に入ってます。というか、西岡さんみたいな人がうらやましいんですね。私自身は馬締さんに近いところがあって、例えば辞書づくりの場面なら、馬締さんのような努力の仕方というのは私はできると思うんです。でも、西岡さんのように局面を一気にひっくり返すような仕事は難しいですね。

新谷 「西行」の時なんか、すごかったですね。

大西 そう、『さいぎょう【西行】』！ 大学教授がテキストに書いた『西行』の項目を馬締さんが手直しします。そこまでは順当な辞書編集部の仕事といえますが。

新谷 そのあとのウラの仕事ですね。

大西 西岡さんの出番です。文章に手を入れられてふてくされている教授に、馬締さんの修正案を脅したりすかしたり、教授の愛人問題までチラつかせてぎりぎりねじ込んで行く場面は痛快でした。

新谷 昭和の時代には、ああいうサラリーマンいたような気もするけど。今でもいるのかな？

大西 『西行』では、教授と西岡さんのやりとりもおもしろかったけれど、馬締さんと西岡さんが『西行』の意味をめぐって話し合う場面もおもしろかったです。

新谷 そうですね。『山家集』の「西行」以外に、あんなに意味があるなんて知りませんでした。恥ずかしながら。

大西 馬締さんは、人物の「西行」以外のありとあらゆる「西行」の意味を列挙することができる。でも、『大渡海』に載せるべき項目は、「人物」以外には「流れ者」と「不死身」の2つでいいとスパッとと言えるのが西岡さんなんですよ。

新谷 どちらも、才能ですよ。辞書づくりの。

大西 私もこんな風に熱く夢中になれる仕事につきたいです。

新谷 できますよ。いつも思っていたら、その世界の方に自然に近づいて行きます。私も、図書館の仕事を考えはじめたの、中学生の時でした。



何か道をやってくる

レイ・ブラッドベリ
(創元推理文庫)

中学1年生の時、この世に「図書館司書」という職業があることを教えてくれた懐かしい本です。

アメリカの田舎町に暮らす2人の少年、ジムとウィル。物語は、秋のある夜、おかしな気配を感じてベッドを飛び出した2人が町はずれの丘の上に不思議なカーニバル団が到着したことを知るところから始まります。

ウィルの父が「図書館司書」という設定なのですが、この図書館、今の私たちが目にする(湧学館みたいな)図書館とはちょっとちがいます。私設図書館といって、町の大金持ちが私財を投入して集めた蔵書を町の人たちに開放している図書館なのです。ですから、図書館がある場所は大金持ちのお屋敷の中。

子ども向けの本なんか全然ない、一般用の本だって古くてボロボロの図書館しか見たことない日本の田舎中学生には、アメリカの子どもたちが輝いて見えました。ブラッドベリは、私の人生に何か大切な種を蒔いてくれた人でした。(新谷)

西村 由布さん(3年)「アンネの日記」完全版 新谷 保人(湧学館司書)

新谷 『アンネの日記』、私にはなかなか難しい本なんです。若い頃から何度もチャレンジしてるんだけど、なんか途中で放り出してしまおうんです。なんというか、思春期の女の子の、「親愛なるキティーへ」みたいな感覚がうまく理解できないというか。

西村 「キティー」はアンネがつくりあげた架空の親友の名前です。いつも日記の書きはじめが「親愛なるキティーへ」で始まります。いわば、架空の親友「キティー」に宛てた毎日の手紙が『アンネの日記』なのですが。

新谷 そういうことを面白いがるセンスって、よくわからなかった。今回もそうなるかな…とこわごわ読みはじめたんですけど、なんと今回は、日記の一日一日を愛おしむように最後まで読めたんです。

西村 へえ。

新谷 たぶん、西村さんが読書感想文に書いた「13歳から15歳まで」という表現が効いたのだと思います。「私達で言えば中学1年生から中学3年までの間」という言葉はよかったなあ。いろいろなヒントをもらいましたよ。

西村 そうなんです。

新谷 13歳の女の子の具体的な姿がイメージできるようにになりました。そういえば、西村さん、中学1年生の時にあの本で読書感想文コンクールに入賞したなあ…とか、クロスカントリーで全国大会まで行ったんだよなあ…とか、そういう出来事をたどってゆくと、それって、隠れ家から出られなかった13歳のアンネ・フランクの夢(=日記)そのものだったんじゃないかということによろやく気づいたというか。

西村 今の、自由な生活を送ることができる私達が『アンネの日記』を読む意味も、そういうところにあるのかもしれない。でも、それにしても、ユダヤ人であるというだけで、人間が同じ人間に対してここまでひどいことができるということに心が折れそうです。

新谷 そうですね。特にアンネの場合は。あと一ヶ月、ベルゲン=ベルゼン強制収容所で



「アンネの日記 完全版」
アンネ・フランク/著、深町真理子/訳
(文芸春秋,1994)

生き延びれば、解放軍(英国軍)が到着していたのだから。

西村 ペーター(隠れ家で同室だったファン・ダーン家の一人息子)も、そうですね。あと三日収容所で持ちこたえられればアメリカ軍が解放したのですから、なおさらです。

新谷 ペーターについては興味深い本を見つけました。シャロン・ドガーというイギリスの作家が書いた小説、『隠れ家』です。副題に「アンネ・フランクと過ごした少年」とあるとおり、あの隠れ家での生活をペーターの視点から描いた小説なんです。いわば、『ペーターの日記』です。

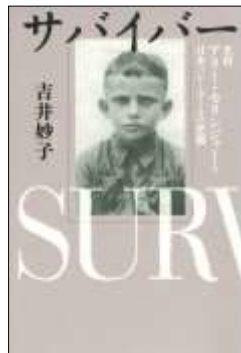
西村 へえ、読んでみたい。

新谷 もう一冊、吉井妙子さんが書いた『サバイバー』という本も興味深い。副題が「名将アラー・セリンジャーと日本バレーボールの悲劇」。一見すると、バレーボールVリーグの外国人監督の伝記みたいですが、じつはこの人、ベルゲン=ベルゼン強制収容所の生き残り（サバイバー）なんです。収容所でアンネ・フランクたちと暮らしている！

西村 そんな本があるんですね。

新谷 戦後も七十年以上の時間が流れています。その時間の中を忘れ去られることなく生き延びてきた『アンネの日記』という本には、今の私たちに、人間とか戦争とかを考えさせる何かはまだいっぱい残っているのだと思います。

西村 この本を読み、アンネに共感したところも、違うと感じたところもいっぱいあります。でも、アンネが言うようにあたえられた性格は一つ。それを受け入れてもらえるようにし、受け入れようと努力するところに、お互いの平和への道があるのではないのでしょうか。そのために成長し、行動していきたいと思いました。



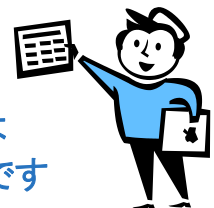
図書臨時開館

のしらせ

6/13(月)

午前10時～午後6時

京極小学校・南京極小学校では
振替休日になっています。運動
会が終わったこともたちはもち
ろん、一般の方もどうぞご利用
ください。



京極読書新聞 は
毎月1日発行予定です

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>

